極私的メディア論

森達也

森達也〈メディア論〉の集大成！

◇メディアの本質的な属性である「嘘」…「信頼を回復してとのフレーズが、検証番組では何度もアナウンスされていた。ならば言わねばならない。メディアとは信頼するものではないし、されるものでもない。「信頼」という概念からは最も縁遠いものでなくてはならない。／そんな浅いレベルでメディアを捉えるから、メディア・リテラシーの意味は「メディアに騙されないこと」などと短絡する。そんなことは不可能だ。表現には自覚的な嘘もあれば自覚しない嘘もある。虚実は融解している。メディアの本質に付随する属性である「嘘」を見抜くことなど誰にもできない。／現象や事件は無限に多面的な構造だ。その無限の視点のうちのひとつを提供するのがメディアだ。それ以上でも以下でもない。「見抜くこと」か「騙されないこと」かの位相で語られるジャンルではない。「視点を変えれば違う実相が見えてくること」を担保しながら接することが、本来のメディア・リテラシーなのだと僕は考える。

◇メディアは天皇制に似ている…メディアは常に利用される客体だ。メディアが情報を操作しているなどと口にする人は多いが、実のところ恣意的に操作することはほとんどない。無自覚なのだ。だから利用されやすい。その意味ではメディアは、歴史を通じて権力争いや戦争に利用されてきた天皇制に似ているのかもしれない。

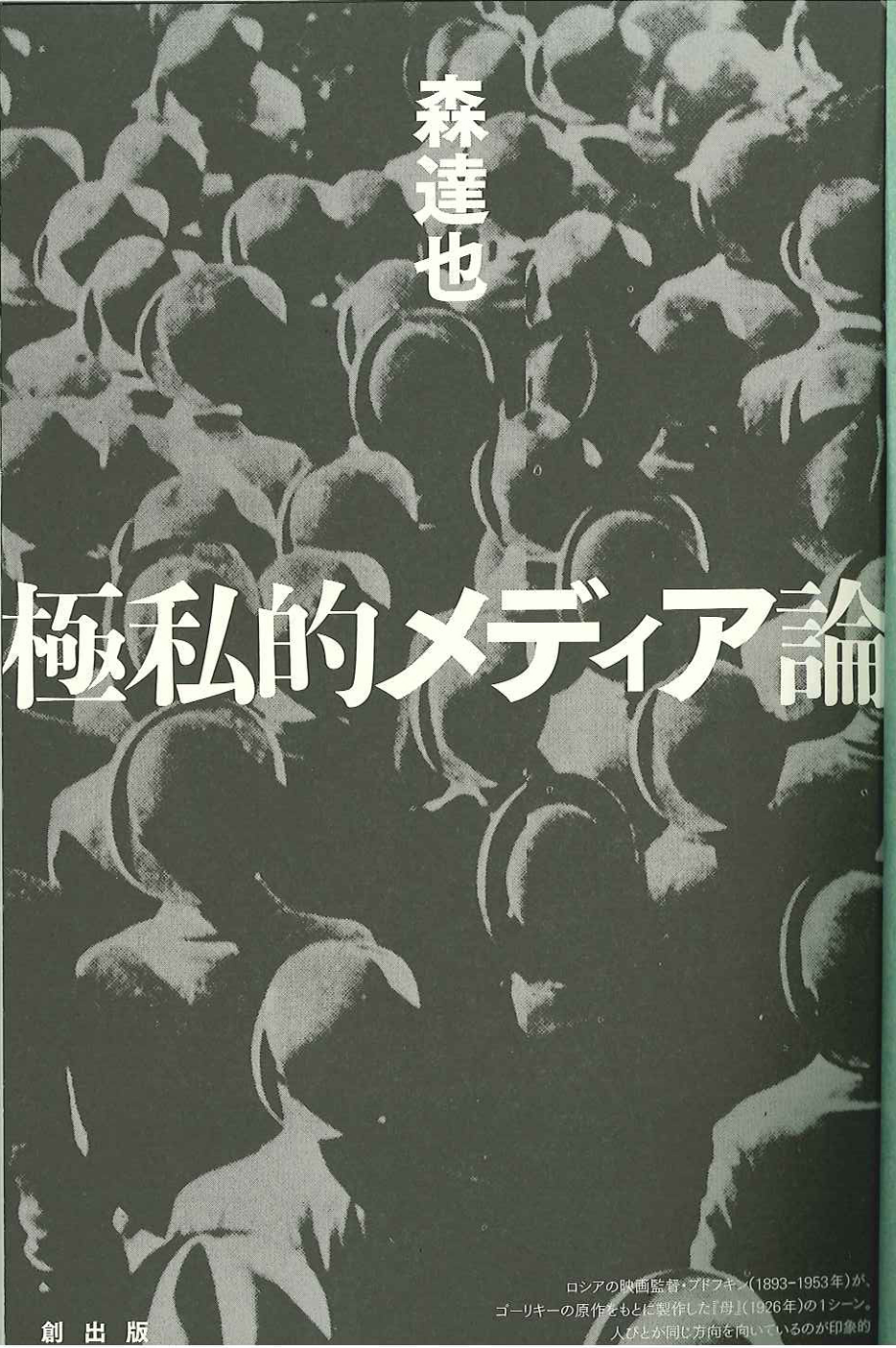
◇「狼が来るぞ」の寓話の結末…危険物の持込は禁止されています。不審なものを見かけたらすぐに乗務員にお知らせください」とのお馴染みのアナウンスが始まった。聞いているうちに網棚に置かれている荷物がすべて危険物に思えてくる。同じ車両の乗客の顔がテロリストや犯罪者に見えてくる。テロが蔓延する国に住んでいるような気分になる。

視点が変われば世界は違う。メディアが単一の視点しか提示しなければ多様な世界は矮小化される。

◇メディアの問題は深刻だ…日本でも、そして世界においても、メディアの問題は深刻だ。でもだからこそ、最後の希望を人はメディアに託す。メディアがその気になれば、確かにこの世界は今よりは良くなる。絶対に変わることができる。メディアにはそのポテンシャルがある。／でもメディアをその気にさせることが難しい。

◇人は仮想の権威に縛られる…人はそもそもが圧倒的な自由に耐えられない。だから適度の規制が欲しくなる。管理や統制を自ら求めてしまう。例えば放送禁止歌という指標（↓ウラにつづく）

創出版



森達也

極私的メディア論

ロシアの映画監督・プドフキン(1893-1953年)が、
ゴーリキーの原作をもとに製作した『母』(1926年)の1シーン。
人びとが同じ方向を向いているのが印象的

創出版

目次

1 メディア批評は有効か＝05年7月号……6
2 「普通ならありえない」逮捕＝05年8月号……16
3 善意や正義による大量虐殺＝05年9・10月号……22
4 なぜテレビが問題なのか＝05年12月号……30
5 メディアと天皇制は相似形 06年1月号……38
6 麻原彰晃を壊した社会＝06年2月号……44
7 拉致問題とメディアの機能不全＝06年3月号……50
8 ライブドアめぐる二項対立＝06年4月号……58
9 市場原理という怪物＝06年5月号……64
10 久しぶりにテレビに復帰＝06年6月号……70
11 安田弁護士バッシング＝06年7月号……76
12 NHKの懲罰人事＝06年8月号……80
13 忸怩たるテレビ出演＝06年9・10月号……86
14 田原総一朗のドキュメンタリー＝07年1月号……92
15 『週刊現代』が投じた一石＝07年3月号……100
16 NHKの「過剰な忖度」＝07年4月号……108
17 「わかりやすさ」を求めるテレビ＝07年5月号……114
18 「あるある大事典」捏造問題＝07年6月号……120
19 知って犯す間違い＝07年7月号……124
20 メディアについての煩悶＝07年8月号……130
21 一年前の騒動＝07年9・10月号……136
22 書かねばならない＝07年11月号……142
23 大連立と読売新聞＝08年1月号……148
24 事件報道と死刑制度＝08年2月号……154
25 死刑制度を語る難しさ＝08年3月号……158
26 角度を変えて見えるもの＝08年4月号……164
27 この国の排他性＝08年5月号……170
28 自主ではなく他律規制＝08年6月号……176
29 北千住での職務質問＝08年8月号……184
30 「死に神」騒動＝08年9・10月号……190

極私的メディア論

31 江川紹子さんへの反論＝08年11月号……196
32 視点が違えば世界は違う＝08年12月号……206
33 死刑制度について＝09年3月号……214
34 セキュリティ意識と刑事司法＝09年4月号……222
35 自覚なき厳罰化＝09年5月号……228
36 小人プロレスとテレビ＝09年6月号……234
37 日本のメディアの不自由さ＝09年7月号……240
38 目玉オヤジの叫び＝09年11月号……246
39 リスクとハザード＝09年12月号……252
40 適切な対応・適正な予算＝10年2月号……258
41 曖昧さと誤魔化し＝10年3月号……264
42 再犯防止と日本のメディア＝10年4・5月号……270
あとがき……278

あとがき

スミソニアン自然史博物館から徒歩で10分ほどの距離にあるホロコースト・ミュージアムでは、「国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）のプロパガンダ」展を特集展示していた。

ミュージアム内部は予想以上に広かった。特集展示も相当に大掛かりな企画で、国民に戦意高揚を訴えるナチスのポスターや新聞広告、ヒトラーの演説や強制収容所の記録映像などを見ながらコースを回り終えるころには、すでに閉館時間が迫っていた。

数多くあるプロパガンダで特に目についたのは、ナチスが権力を掌握する過程における共産主義への敵視と、その後に続くユダヤへの激しい嫌悪だ。

この時期のポスターや新聞の風刺絵などに描かれるユダヤ人は、鷲鼻で長い髭、黒づくめの衣装で口もとには狡猾そうな笑いという定型的なカリカチュアで、まさしく『ヴェニスの商人』に描かれるユダヤ人の金貸しシャイロックの外見的イメージそのままだ。

難破寸前の船に乗るドイツ国民たちを、巨大なシラミの群れが襲撃しようとしているポスターがあった。キャッチコピーを翻訳すれば、「今こそゲルマン民族は一丸となって害悪と闘おう！」。もちろんこれは害虫駆除を呼びかけるポスターではない。シラミの顔をよく見ると、鷲鼻で長い髭を生やしている。つまりユダヤ人だ。

当時のシラミは、発疹チフスを媒介する恐ろしい虫だった。害虫のレベルではない。自分たちの生命を脅かす危険な敵なのだ。

第一次世界大戦で敗戦国となったドイツは、ヴェルサイユ条約で莫大な賠償金を連合国側に支払うことを要求され、国家経済は極度に疲弊した。条約締結の際にイギリス代表として参加した経済学者ジョン・メイナード・ケインズは、この条約の強圧性を強く批判しながら途中帰国して、その後に書いた「平和の経済的帰結」で、このままでは再びドイツによる戦争が起こると予言した。ケインズのこの指摘はイギリス国家や国民から激しく批判されたが、結局のところこの危惧は見事に的中した。

賠償だけではない。ドイツに対して周辺国への国土割譲も要求したヴェルサイユ条約は、ドイツ国民の民族意識を強く刺激した。

だからこそ、ヴェルサイユ体制の打倒やゲルマン民族の優越性と生存権の確保を訴えながら現在の危機を乗り越えるのだと宣言したヒトラーは、ドイツ国民から熱狂的に支持されて、世界で最も民主的な憲法と謳われたワイマール憲法下で正当な手続き（つまり普通選挙の過程）を経ながら、権力を掌握した。

戦争前の政治的プロパガンダの特徴は、仮想敵を設定しながら危機を煽ることだ。敵はじわじわと私たちの安寧な生活を脅かす。このままでは滅亡する。だから戦わなくてはならない。愛するものを守るために武器を手に取らなければならない。強い政治家を選ばねばならない。

こうして人類最大の惨禍である第二次世界大戦は始まった。

ナチスのプロパガンダ展のコースの最後は、出口へと続く小さな部屋で、近年から現在にかけての

戦争や虐殺の写真や資料が展示されていた。ルワンダやコソボ、シエラレオネや9・11などの写真を眺めながらぐるりと室内を回れば、イランのアフマディネジャド大統領の写真が、出口の横に展示されていた。演説中に撮られた一枚だ。激しく何かを叫んでいるかのようなその表情は、見方によっては確かにとても挑発的で好戦的だ。

そこでふと気がついた。近年から現代へと続く虐殺や戦争と銘打ちながら、この部屋の展示には、何度も続いた中東戦争がない。イスラエル・パレスチナ問題もない。要するにプロパガンダの危険性を訴えるはずの展示で、最後の最後に、とても露骨なプロパガンダが実践されていた。

イエスを殺した民であるユダヤ人に対しての蔑視と迫害は、ヨーロッパにおいては長く続いてきた。ちなみに『ヴェニスの商人』に登場する金貸しシャイロックは、決して強欲非道なだけではなく、ユダヤ人差別に抵抗してキリスト教徒を憎悪し、最後には哀れな結末を迎える人物として描かれている。明らかに一方的な嫌悪や差別感情に、自分たちの生命を脅かす（シラミのように危険な）外敵であるとの危機意識を重ね、ナチスはホロコーストを正当化した。

第二次世界大戦終了後、ホロコーストの凄惨な状況を知ったヨーロッパは、大きな衝撃を受けた。なぜならホロコーストまではゆかなくとも、彼らもまた同じようにユダヤ人を差別し、蔑視し、迫害してきたからだ。

自らの加害者性に萎縮した欧米社会は、イギリスの三枚舌外交が伏線となったイスラエル建国や、

その後の国連決議を遵守しないイスラエルのプレゼンスを黙認する。

そしてホロコーストによって膨大な数の被害者遺族となったユダヤ人たちは、激しい自衛意識と危機意識にシオニズムを相乗させながら、約束の土地に強大な軍事力を保持する国家を建設した。国連決議には従わず、核兵器や生物兵器など大量破壊兵器の保持を噂されながら（核兵器は事実だ）、今も周辺諸国を挑発し、パレスチナの民を迫害し続けている。

こうして被害者意識は連鎖しながら反転する。そこに悪意はない。愛するものの生命を守りたいとする自衛の意識だ。容易に正義へと転化する。悪意ではないから後ろめたさがない。つまり摩擦係数が低い。だから滑る。気がついたら別の場所にいる。それも無自覚なままに。

ホテルに戻って部屋のテレビのスイッチを入れれば、パレスチナ自治区ガザに向かう支援船団をイスラエル軍が急襲し、8人のボランティア・スタッフが殺害されたとのニュースが報道されていた。ニュースを紹介しながらキャスターは、なぜ非武装の民間人に対して軍人が、これほどに非道なことをできるのかと嘆息していた。

僕は吐息をつく。終わらない悪夢を見ているようだ。

ワシントンDCに行った理由は、NHK-BS「未来への提言」のロケで、ワシントン・ポスト副社長のレナード・ダウニーに会うためだった。ウオーターゲート事件やペンタゴン・ペーパーズ世代のダウニーは、1991年からワシントン・ポスト編集主幹を務めていたが、自分はもう現場にいるべきではないと2008年に辞任した。

その理由をダウニーは、２００１年のイラク侵攻直前に「イラクに大量破壊兵器は存在しない」との情報を一面から外した自分の判断は、取り返しのつかない重大な間違いだったからだと公表した。つまりブッシュ政権を（結果的に）支持した過ちを認め、その責任を取った。

辞任した翌年、ダウニーは「公的支援や市民のドネーションなどによって支えられるＮＰＯメディア化を既存メディアは目指すべき」などの提言を盛り込んだ論文「米ジャーナリズムの再建」を発表して大きな話題となり、日本でも朝日新聞や毎日新聞がこの論文を取り上げた。

つまり市場原理からの脱却だ。資本との関係を断ち切ったメディアの意義については、本文でも何度か触れたＮＨＫの存在理由に重複する。でもアメリカにおける公的支援やドネーションの意識は、日本とはかなり違う。自分たちにとって重要なメディアを自分たちで支援しようとの意識が、日本人には徹底して薄い。管理され与えられることに馴れすぎている。だからこそこれまでのところ、この国における多くのウェブ・ジャーナリズムの試みは成功していない。

ウェブ・メディアと既存のメディアとの融合について、ダウニーはきわめてポジティブな状況を予想していた。その過程で多少の過ちや判断違いはあったとしても、最終的に人々（市場）は決して悪い選択をしないとの信念が、彼の思想の根底にあった。僕は同意できなかった。それほどに人々を信頼できなかったのだ。おそらくはダウニーからすれば、僕は「なんとネガティブな発想をする男なのだ」ということになるのだろう。

本文でも触れたように、アメリカでペンタゴン・ペーパーズやウォーターゲート事件が大きな問題になっていたとき、日本では毎日新聞が外務省密約問題についての記事を掲載していた。ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストの記事は国民から大きく支持されてベトナム戦争を終結に導き、さらにニクソン大統領を辞任に追い込み、記者たちの多くは国民的なヒーローになった。これに対して外務省密約問題は、政府の背信行為よりも情報入手の過程に付随していた不倫問題に国民は関心を示し、記事を書いた西山太吉記者は国家から訴えられて、有罪判決を受けて退社した。

もちろん、西山が情報源である外務省女性事務官を守らなかったことや、記事を掲載する前に野党の政治家に情報をリークしていたこと、そして記事そのものも曖昧な書き方をしていたことなど、単純に比較することはできない。でもそれを差し引いたとしても、国民の意識のありかたはあまりに違う。念を押すが、アメリカという国家を全面的に評価するつもりはない。エゴイスティックで粗野で力任せで単純で独善的な国だ。でもジャーナリズムについて考えれば、アメリカは確かに背骨が通っている。思慮は浅いし迷走はするし間違いも多いけれど、復元力は確かにある。

ところが日本の場合は、船が左舷に傾けば大勢の人が右舷に集まり、右舷に傾けば今度は左舷に集まる。ほとんどの人が多数派になりたがる。その帰結として、船はいつまでも揺れ続ける。復元しない。揺れ続けるから不安になる。不安になるから群れの論理がより強く発動する。

そんな市場の国で、ウェブが融合したメディアが及ぼす影響力について、どうしてもポジティブな展望を持てない。そう言う僕に、ダウニーはにっこりと微笑みかける。大丈夫だ。日本の人々だって、それほど愚かではないはずだと。

僕もそう思いたい。人々はそれほど愚かではないと。時おりはつまずいたり道に迷ったりすることはあっても、最終的に大きな過ちは犯さないと。

現状はネガティブな要素ばかりだ。でも確かに、嘆いたり愚痴を言ったりするばかりでは何も変わらない。だから僕も信じる。人々は最終的に大きな過ちは犯さない。メディアはこの社会を、より理想に近い形にするために、大きな役割を果たすはずだ。

もしもそれができないのなら、この国はきっとメディアによって滅ぶ。つまり自滅だ。二者択一は嫌いだけど、この場合は他に選択肢がない。どちらにせよ選択する主体は、市場としてメディアを規定する人々だ。

つまり僕であり、あなたなのだ。